

－ 寄稿 － 「震災のエピソード」

東北大学大学院薬学研究科 叶 直樹

東日本大震災から早2年8ヶ月の歳月が過ぎた。震災直後に比べて、最近では余震の数はかなり減り、揺れの規模も小さくなつた。東北大学の構内では、倒壊の危険性が大と判断された建物の取り壊しが進み、新しい建物の建築が進んでいる。仙台の街中を見回しても、建物や橋、道路などの建造物の修復はかなり進んだようだ。建造物の修復の跡は、よく見ると至る所に散見されるが、もはや毎日見ている日常の景色の中に溶け込んでおり、頭をリセットして再認識しないと見過ごしてしまうレベルになっている。一方、修繕が困難と判断された建物が取り壊された後の更地や、津波で甚大な被害を受けた仙台空港周辺には雑草が生い茂り、約3年前までそこに何があったのかを思い出すのが既に難しくなつてゐる。震災当時の自身の生々しい記憶も薄れつつある。

昨年の晩秋、マレーシア・クアラルンプールで開催された国際学会に参加した際に、昼食会場でたまたま横に座った東南アジア人研究者と話す機会があった。自己紹介の際、自分は日本の東北大学から来たのだと話すと、彼は、自分は仙台に住んでいたことがある、と返してきた。改めて聞くと、なんと彼は震災当時、東北大学に留学しており、家族と共に仙台に住んでいたとのことであった。私は震災時、海外からの留学生が困っている状況に遭遇した経験があつたので、早速、その当時の話を切り出した。

震災の翌日、私は被害状況確認のため自転車で大学に出勤した。研究室の確認を終え、前日の大渋滞のために大学に残してあつた車に自転車を積んで帰宅する際に、キャンパス前のバス停で留学生らしき外国人を見かけた。うろうろしていたので、こちらから手を振り、声をかけた。話を聞くと、ポスドクである彼も研究室の様子を確認するためにとりあえず歩いて大学に来て、これから帰るのだと言う。帰る方向が一緒だったので、車に乗せて彼の家(留学生会館)まで送つてあげることにした。車中の会話では、彼と彼の家族が地震の状況を把握できずに困惑していることが伺えた。そこで、ラジオで聞いた仙台と日本の現状を教え、「もし今、何か困っていることがあれば手伝うよ」と申し出たのだが、「ありがとう、今のところ緊急を要することは無いので大丈夫」という返事だったので、留学生会館に彼を降ろし、そこで分かれた。そういう話である。

さて、マレーシアで一緒に食事をしていた東南アジア人は私の話を途中で遮り、丸い目でこっちを見て言った。「それは、その時と一緒に帰った外国人ポスドクは私です！」…なんと、嘘のような本当の話である。

お互い、顔ははっきり覚えていなかつたが、状況は克明に覚えていた。震災の後、暫くして彼はマレーシアの大学でポジションを取り、家族共々帰国したことである。あの時の親切は今でも感謝しているという。昼食時間も終わりに近づいたので、彼とはそこで記念写真を撮つて分かれた。

震災時、赤の他人と関わり、お互いに助け合つたエピソードが他にも幾つかある。多分、被災した誰にでもあるのだろうと思う。他のことに関しては忘れてしまつていることが多いが、不思議なことに、そういうエピソードはなかなか記憶から消えない。

